

ピジン語とクレオールそして外国語学習

蔦 恭嗣

言語の話となると、話としては広い分野に関わりがあり、言語学者、心理学者、脳科学者らの領域であって我々素人が口を出す余地などなさそうであるが、普段から言語を用いそれなりに考えている者として書く。

あることがきっかけでピジン語およびクレオールに関心を持つことになった。生物で、現在のように抽象的なもので表現しうる言語を持つのは人類だけであろう。人類がどの時期に言語なるものを獲得したかというのは、諸説あって我々が議論してもほとんど無意味であろうと思う。ただ初期の言語は具体的な物と結びついた単語であったろう。馬なら馬を表す「音」である。そして馬はすぐに絵に描かれたであろう。絵と言っても古代遺跡に描かれたような線画である。そしてその「画像」は、先ほどの馬を表す「音」と結びついたであろう。この画像と音は、他者とのコミュニケーションに使われたのであろうと思われる。つまり具体的な物を表す画像と音、とが言語の初めであろう。抽象的な言語が現れるのは、ずっと後のことと思われる。もちろん文字の発明もずっと後の話と思われる。

言語は初期から、音と聴覚によるものと、画像と視覚によるものとが並存していたと考えられる。しかし現在も文学の朗読など広く受け入れられているし、詩や短歌など音声による朗詠が基本である。そして言語は、やはり音声が先に立つと思う事がある。

まず書かれた言語は、先に述べた「馬」や「牛」などのように具体的な物に対して名詞としての機能だけで無く、動詞、形容詞、副詞などの機能が必要となってくる。音としての言語も同じではないかという論もあるかと思うが、確かに現在の多くの言語は、書かれた物と音声による物とは強く結びついており、文法なるものがある、これは音声あるいは文字表現に共通に成り立つ。そしてこの文法が、多くの言語で異なっているのである。そして私が言語において音が優先されるという根拠の一つが、ピジン語といわれるものとクレオールとよばれる変則言語である。これらの言語は、母国語の違う人達のコミュニケーション手段として用いられてきたものである。外国語を話す際に、彼らの母国語の影響が大きく出るのである。例えばピジン日本語の例として、中国人の話す

「私、日本人ない。中国人ある」

のような言葉があり、中国語の発想が元にあると思われる。これは違う文化圏で異なる言語を使っていた人達の間で自然発生的に生じるもので、近年も植民地などで生じた。従って英語やフランス語、そしてそれ以前のスペイン語やポルトガル語のピジン言語化が広く見られる。これらはやはり言語を音として捉えた場合に起こる現象で、言語が文字からピジン化する事はあまり考えられないのではないか。書かれた言語から、名詞の順序が置き換わり、文法がおろそかになることは考えにくいからである。

ピジン語は、次の世代にはある意味確立されてクレオールと呼ばれるものになる。この言葉は広く用いられ、それ自体確立された言語のようなもので、これを話す人達には母国語同様の言語なのである。東南アジアやインドなどで話される英語は、イギリスや米国などで使用される英語とはかなり違っている。しかしそれは、当地では一般的に使用されており、独特の文法もあるのである。米国の黒人の使用する英語にも、ダブルネガティブとというのがあって、二重否定を否定の意味に用いるのであるが、彼らが古くから持っていた言語の反映である。

日本語自体が北方系と南方系言語のクレオールであるという説がある。また古代に流入した漢字や中国語は、名詞だけでなく多くの品詞で日本語化していった。その際従来の日本語には大きな変革が加えられたはずだ。この変革が文字が先か音が先かといえば、やはり音が先だったのではないだろうか。日本の古代歴史書である「日本書紀」は漢文で書かれているが、所々中国人はこうは書かないという日本人の癖が出た(和臭)漢文が見受けられるらしい。これは日本語化しているわけではないのでベジン化でも無く、単に外国語習得が不十分なだけである。

ある意味世界中で使われている言語も互いに影響し合っている以上、元はクレオール言語であろうという仮説は充分成り立つであろう。ヨーロッパのように多くの民族が共存していた社会では、言語もそれぞれ影響し合っていたに違いない。英語ですら千年前のノルマン人征服により影響を受け、クレオール化したという説は広く信じられている。先述したように近年でも、新しい言語が生まれているのである。そのときやはり音としての言語が、書かれた言語より優先するのではないかと私は思うのである。

このようにピジン語やクレオールについて考えると、最近気になっている外国語の学習について一言言いたくなってくる。現在世界で最も多く用いられる言語はやはり英語であろう。そして英語をベースにしたクレオールであろう。インドのクレオール英語は動詞はほとんど現在進行形にする、またシंगाポールの英語は主語やbe動詞が欠落する、あるいは疑問文も語順を変えずそのまま、最後に疑問を表す単語をtagを加える、などなど

本来の英語からは外れた言語となっている。そしてこれらは日本の大学入試であれば、完全に間違いとなるのである。地球上で現在かなり多くの人々が使っている英語は、日本の大学入試では否定されている。これを日本の教育のレベルが高いと誇れるのであるのか。

最近思うのは、日本の語学教育の問題点である。現在でも英語は文系、理系を問わず重要科目である。莫大な時間とエネルギーをかけて、せいぜい英米の中学生か高校生程度の英語力しか身につかないのだ。また以前、放送大学の講師が話していたが、外国語を話すとき、話し手の思考力は母国語で話すときに比べ30%位落ちるとのことであった。だから英語を母国語とする相手に英語で議論するのは愚であり、自分より下手であっても通訳を介するのが得策であると言っていた。

現在ではネット上の書かれた英語はほとんど日本語に訳すことができる。まだ訳文自体は不完全ではあるが、AIの発達などから翻訳は格段に正確となるだろう。それに音声によるしゃべり言葉の同時通訳も、スマホを通して実用化の段階に入るのは目に見えている。音声認識の精度は以前に比較すると格段に上がっている。現在でもグーグルには音声から文字に変換するソフトがあつて、著者など話し声がよく聞き取れないといわれることも多いのだが、このソフトでは、ほとんど間違いなく文字変換をしてくれる。十年ほど前のソフトは声の特徴を前もって学習させるものがあつた。今のものは全くそういった手続きなしで、誰がしゃべっても正確に聞き取るのである。今や人が持つ音声認識を超えているのではないかとさえ思う。また専門用語かと思われる言葉すら、かなり正確に変換するのは驚く。おそらくAIにより前後関係も考慮した変換がされるものと思われる。

現在の小学生が社会人になる頃には、自動翻訳、通訳などは電子機器を通して今以上に正確になされるものと思われる。音声認識も今よりもずっと精度が高くなる。そうなれば外国語は、常識的な範囲で知っていれば良いことになるではないか。我々には学ぶべき事柄が増加しているのであるから、外国語の学習をもっと減らして良いのではないか。現在でも、普通に英語を学習した者が、直接英文を読むより自動翻訳機能を使った方が誤解無く内容をつかめるであろう。その逆も全く正しい。

以前言語学者の金田一秀穂氏が彼の講演の中で、学生に機械翻訳の話をすると決まって機械翻訳は感情が入らないから、という否定的な感想を述べると話していた。彼はそれに対して、直接学生に言ったわけでもないだろうが、その学生の英語力で感情が伝えられるのか、もつと言うと彼の日本語ですら正しく感情を伝えられないだろう、と最後はジョークかも知れないが、なぜか機械翻訳に対する同じ感想が若い人にも「すり込まれている」と述べていた。このように電子機器の外国語翻訳機能は、外国語を学んだほとんどの人達

の力を確実に超えている。そしてこの差は、これからも短時間でどんどん開いていくのは間違いでない。

しかしそうになると言葉のピジン語化そしてクレオール化というものもなくなるのであろうか。言葉は生き物だから、また違った形で変化を遂げるかも知れない。ある言語を母国語とする人達の間での変化は当然続くであろう。ただこれまで人間がやっていた異なる言語間の橋渡しは、確実に電子機器が肩代わりするであろう事は間違いでない。

薦 恭嗣

つた たかし

- 1947年 大阪に生まれる
1971年 京都大学工学部卒業
同年 神戸大学工学部助手
1992年 神戸大学工学部教授
2011年 同 退職
神戸大学名誉教授